

薫の表情——「顔」表現の反復——

倉田実

一 「顔」表現

『源氏物語』薫大将の精神的なありようは様々に言及されてきたが、この小稿では、精神的内面的機制の現れとしてある表情を問題にしてみたい。精神的な営みは、単なる喜怒哀楽という次元にとどまらずに、固有の表情を獲得していくが、その表情の意味が薫においてどのような位相にあるかを探ろうとするものである。

表情といった場合、多様なアプローチの仕方や問題の立て方があるが、ここでは「顔」という形をとる表現に注目していきたい。筆者は、前稿「表情の発見—夕霧の「顔」表現—」〔大妻女子大学紀要—文系—〕28号、一九九六年三月)において、「知らず顔」「事あり顔」「馴れ顔」などといった「顔」表現のありようを夕霧において検討した。「顔」表現といった場合、「顔」が名詞となるか接尾辞となるかで意味合いは違ってくるが、「顔(接尾辞)」表現の用法が『源氏物語』において飛躍的に増加して人々の表情が捉えられるようになり、この形式が夕霧において顕著になって主題性と連関する具合を指摘してみた。この前稿を受けて、さらに薫の表情を「顔」表現に着目して検討しようとするわけである。

問題にする薫の「顔」表現を一覧すれば次のようになる。「顔」はすべて接尾辞とされる用例だけであり、名詞になる「顔」表現は

ここで除外してある。以下、「顔」表現とした場合の「顔」は、接尾辞の場合のみになる。また、この用法は、意味的には顔面に現れた表情だけでなく、そのように感じられる態度・仕草・物腰などを意味する場合が多いが、仮にそうであったとしても、顔面の表情を打ち消す必要はないとの判断があり、顔面かどうかの区別にこだわらないことをお断りしておきたい。

1	よろづも知らず顔	地・↓光源氏	・横笛	333頁
2	心寄せあり顔	地・↓玉鬘の大君	・竹河	86頁
3	世の中を背き顔	会・↓世間の人々	・橋姫	123頁
4	いとうけぱりたる後見顔	地・↓匂宮	・椎本	206頁
5	事あり顔	会・↓大君	・総角	228頁
6	いと馴れ顔	地・↓大君	・総角	242頁
7	知らず顔	地・↓今上帝	・宿木	372頁
8	事あり顔	地・↓中君	・宿木	388頁
9	知らず顔	会・↓空の景色	・宿木	407頁
10	いと馴れ顔	地・↓中君	・宿木	416頁
11	ことごとしくしたて顔	心・↓中君	・宿木	430頁
12	つれなし顔	心・↓浮舟	・東屋	75頁
13	昔を忘れ顔	心・↓中君	・浮舟	99頁

14	気色のいささか乱り顔	地・↓匂宮	・蜻蛉	210頁
15	知らず顔	会・↓匂宮	・手習	355頁

夕霧には16例、光源氏には13例の「：顔」表現があったが、薫は15例であり、その内面的精神的ありようは夕霧と同質的である。薫は、宇治に住む大君、中君、浮舟の三人、及び都では玉鬘の大君や女二の宮、あるいは召人などと交渉を持つが、その際の特徴として、薫固有の表情が、同じ、もしくは近似した「：顔」表現でもって反復して語られるという事情がある。5と8に「事あり顔」、6と10に「いと馴れ顔」とあるが、5・6は大君、8・10は中君に対する時のものであり、姉妹に対して反復する表情が語られている。また、2「心寄せあり顔」、4「いとうげばりたる後見顔」、7「知らず顔」、11「ことごとしくたて顔」、12「つれなし顔」、13「昔を忘れ顔」なども一見すると関連はなさそうだが、それぞれは女性たちとの距離の取り方を案じる際の「：顔」表現として同一的であり、またここから帰趨される内面的機制も薫的である。

以下、それぞれの「：顔」表現の用例を検討しながら、薫の表情における特質を考えていきたい。

二 幼児の表情

一例目の「よろづも知らず顔」は、物語正篇の段階のもので、幼児薫の八見られる√表情であるとともに、このように八見る√光源氏の内面のありようも示している両義的である。

故権大納言のはかなく亡せたまひにし悲しさを、飽かず口惜しきものに恋ひ偲びたまふ人多かり。六条院にも、おほかたにつけてだに、世にめやすき人のなくなるをば惜しみたまふ御心に、まして、これは、朝夕に親しく参り馴れつつ人よりも御心とどめ思したりしかば、いかにぞや思し出づることはありながら、あはれ

は多く、をりにつけて偲びたまふ。御はてにも、誦経などとりわけさせたまふ。1よろづも知らず顔にはけなき御ありさまを見たまふにも、さすかずにいみじくあはれなれば、御心の中にまた心ざしたまうて、黄金百両をなむ別にせさせたまひける。

(横笛333頁)

二歳になった薫は、幼児の特性として純真無垢であり、「よろづも知らず顔」とされている。それゆえに光源氏は「あはれ」を感じているが、いつも「あはれ」の情で薫に接しているわけではない。男子薫出生を知らされた時点で、光源氏は「かく忍びたる事の、あやにくにいちじるき顔つきにて、さし出でたまへらんこそ苦しかるべけれ。女こそ、何となく紛れ、あまたの人の見るものならねば安けれ」(柏木288頁)と無情な思案をしていた。薫が「あやにくにいちじるき顔つき」であること、すなわち柏木の顔つきと似ていること、これは光源氏にとって絶対的な恐懼である。「顔つき」なる語は、この物語で三例使用されており、「いたう酔ひしれてをる顔つき」(乙女23頁)として夕霧の寮試予行の任に当たった博士の例にあり、もう一例は、出生した冷泉帝の「あさましきまで紛れところなき御顔つき」(紅葉賀400頁)になる。桐壺帝が若宮の冷泉帝を見る場面だが、その容貌が光源氏のそれと、呆れるほど瓜二つだという語りで使用されていた。幼児薫の顔に対して「かをりをかしき顔さま」(柏木313頁)と純粹にその容貌も語っているように、この物語では多様な顔にまつわる表現があるが、それらの中で、「顔つき」は、具体的な顔の造作を言うことで使用される。「柏木」巻の「あやにくにいちじるき顔つき」は、「紅葉賀」巻の「あさましきまで紛れところなき御顔つき」と呼応して、秘される親子関係を容貌の類似から指示する、象徴的暗示的な表現になる。桐壺帝は、光源氏と冷泉帝の容貌の類似の真実を知らないようだが、薫と柏木の容貌の類似は、光源氏の知るところである。この二組の類似する容貌については、「顔つき」表現以外でも語られるが、その時、物語は緊張の度合を強めているといえる。薫の出生は、柏木と

似た容貌であったがゆえに、光源氏の思案の形で、新たな緊張を強い
ていることになる。

幼児薫の顔は、「よろづも知らず顔」である。しかし、そうであるが
ゆえに、その顔の持つ意味が多様に光源氏に押し寄せてくる。五十日
の祝でも、薫を抱く光源氏などの様子は、「いと何心なう物語して笑ひ
たまへる、まみ、口つきのうつくしきも、心知らざらむ人はいかがあ
らん。なほ、いとよく似通ひたりけりと見たまふに」(柏木314頁)と語ら
れていた。薫の顔は「いと何心なう」であり、また、容貌が柏木と類
似している。無垢であることよって多様な色を染めることができる
ように、「いと何心なう」いる薫は、光源氏の内面で染められて見ら
れている。柏木と似ているという色が、おのずと滲んでしまうわけ
であり、先の「横笛」巻も同断である。「よろづも知らず顔」とする指
示の仕方自体、いつかは知るということを内在させているわけであ
り、無心無垢な薫の表情は、そうであるがゆえに光源氏の内面に「あ
はれ」を去来させることになる。

この後も、光源氏が薫を抱く場面では、必ずその無心さが捉えられ
ている。「わづかに歩みなどしたまふほどなり。この筈の櫛子に何と
も知らず立ち寄りて、いとあわたたしう取り散らして食ひかなぐりな
どしたまへば」(横笛337~338頁)、「(櫛子から)ゐて放ちてのたまひかく
れど、うち笑ひて、何とも思ひたらずいとそそかしう這ひ下り騒ぎたま
ふ」(横笛339頁)などあり、薫が物語で最後に光源氏に見られる場面
は、「入道の宮の御方に渡りたまふに、若宮も人に抱かれておはしまし
て、こなたの若者と走り遊び、花惜しみたまふ心ばへども深からず、
いといはけなし」(幻17頁)とある。ここでは、すでに無心ではいら
れない成長をみせているが、「いといはけなし」と無心の延長である
かのように見られている。「よろづも知らず顔」は、見られる薫の無
心無垢な表情を言いつつ、見る光源氏に多様な意味を喚起させる記号
性を帯びているのであり、無心無垢の薫がどのような色で染められる
か、薫が何を知るようになるかが、すでに将来の問題として敷設され

ていることにもなる。薫の顔は、正篇の物語で少なからず波紋や磁場
を形成させているわけであり、続篇を予感させていることになる。

三 薫のスタンス

匂宮三帖での薫に関わる「顔」表現は、2「心寄せあり顔」(竹
河86頁)の一例のみであり、「匂宮」巻と「紅梅」巻には「顔」表
現そのものが誰においても使用されていない。

「竹河」巻は、懸案であった玉鬘の大君の処遇が、冷泉院参院で決着
したのを受けて、密かに思慕していた薫の表情として語られている。

(薫は)この御方(玉鬘の大君)にも、²心寄せあり顔にもて
なして、下には、いかに見たまふらむの心さへそひたまへり。夕
暮れのしめやかなるに、藤侍従(大君の兄弟)と連れて歩くに、か
の御方の御前近く見やらるる五葉に藤のいとおもしろく咲きかか
りたるを、水のほとりの石に苔を蓆にてながめたまへり。まほ
にはあらねど、世の中恨めしげにかすめつつ語らふ。

薫 手にかくるものにしあらば藤の花松よりまさる色を見ま
しや

とて花を見上げたる気色など、あやしくあはれに心苦しく思ほゆ
れば、
(竹河86頁)

この薫は、玉鬘の大君側に表面的には「心寄せあり顔」で、内面
では「いかに見たまふらむの心」があるとされているが、全集本の頭
注に、「匂宮」巻では「薫は同じ冷泉院に住む女一の宮に対して『も
の馴れ寄ることも』なかったとあった。匂宮巻とこの巻とで、薫の人
物像に違いがある」と指摘されているように、「竹河」巻の薫像
と「匂宮」巻の薫像の違いが問題にされている。違いは、この箇所
以外でも明白だが、この点に対する理解としては、「竹河」巻が玉鬘
側の語り手、「匂宮」巻は薫側の語り手になるという、語り手の相違
としてここでは処理しておきたい。⁽³⁾語り手が相違することで、対象の

把握に差異が生じるわけであり、どちらが正しいかという問題ではない。しかし、差異があったとしても、すでに薫的な性向の一端がどちらの巻でも示されているとするのが筆者の立場になる。なお、宇治十帖全般の薫像の問題については、藤村潔氏に簡便な整理がある。

さて、語られる薫の特質として、思慕する女性に対する距離の取り方が、必ず「：顔」表現で押さえられるという事情がある。ここでは、玉鬘の大君に対する「心寄せあり顔」でもって示されている。これが玉鬘の大君に対する薫のスタンスの取り方であり、ポーズでもあり、また、演技にもなる。悠揚と構えたり、真情を素直に披瀝したりとすることは薫にはあり得ず、距離の取り方が自ずと表情として表現されることになる。表情が語られる一方で、「いかに見たまふらむの心」という、「顔」の下に隠されたり、背馳したりする「心」の存在も薫の場合は提示されてくる。別言すれば、「顔」は表・外面、「心」は裏・内面であり、その離反・分裂がすでに前提的になっているありようが指摘できる。また、「：顔」表現の成立自体が、心的機制の所在を暗示するものであることよって、その表情にかかわる心のありようはすでに所与のものとなっている。

この巻の薫は、ひそかに玉鬘の大君に思慕を寄せているが、それほどのような自身の行為で相手に示すのかという点において、すでに薫的である。すなわち、相手に対する恋情を直截に示すことなく、言わば思わせ振りのポーズでもって自分の意向を忖度して貰おうとする姿勢を示している。「心寄せあり顔」は愛情ではなく単なる好意のありようを示す表情であり、思わせ振りである。しかし、その表情を支えているのが「いかに見たまふらむの心」という、愛情を読み取ってほしいという恋情である。「心寄せあり顔」という表情と、「いかに見たまふらむの心」とは、背馳・離反しているのであり、薫はこうした分裂を生きていくことになる。「匂宮」巻と「竹河」巻とで薫像は分裂しているが、また、違った位相で分裂した薫像も認められることになる。外面と内面との分裂は、精神的に薫において顕著な徴候になる。

四 道心とかかわる顔

この節から宇治十帖の用例になる。次の引用は、俗聖八宮の存在を、その法の師である阿闍梨から聞き及んだ薫が、厚誼を求めて阿闍梨に託した伝言部分になる。

法文などの心得まほしき心ざしなん、いはけなかりし齡より深く思ひながら、え避らず世にあり経るほど、公私に暇なく明け暮らし、わざと閉じ籠りて習ひ読み、おほかたはかばかしくもあらぬ身にしも、世の中を背き顔ならむも憚るべきにあらねど、おのづからうちたゆみ紛らはしくてなむ過ぐしくるを、いとあり難き御ありさまを承り伝へしより、かく心にかけてなん頼みきこえさする、
(橋姫123頁)

この「世の中を背き顔」は、一例だけしかない薫の道心とかかわる「：顔」表現になる。この部分に対して、全集本は「薫の道心の深さが詳術されるが、その内的契機にほとんどふれられていない点に注意。：薫の奇特な人柄に由来する仏道への傾斜と理解されかねない。ここに八宮との特殊な関係の生ずることが予想されよう」と指摘しているが、首肯されよう。「奇特な人柄」だけが浮かび上がり、道心の「内的契機」の存在は、その所在さえ隠蔽されている。言われている言葉に嘘があるわけではなく、また、この言葉自体は薫の真実の思いになる。しかし、出生の秘密による道心の発生という内的契機は、完全に隠蔽されている。言葉と本心が道心を言う中で乖離していることになる。

また、道心の所在を「法文などの心得まほしき心ざし」と説明し、「世の中を背き顔」でいたいとの願望が言われているが、これらの措辞自体が、道心・出家の方途を自ら閉ざしているとも取れよう。「法文などの心得まほしき心ざし」がそのまま出家に直結するわけではなく、それどころか「世の中を背き顔」でいることを願ったとしても、現

実は忌憚せざるを得ない情況だという。「世の中を背き顔」は、世の中を厭い顔ということであり、この言い方自体、出離そのものとは無縁である。薫の内部に道心を切実に願う心情があることは疑いない。しかし、それとて直截に言えないわだかまりが出生の秘密によって醸生されているのであり、「世の中を背き顔」としか表現できないのである。そして、現実には「世の中を背き顔」であることも忌憚されている。薫は、道心にかかわる表情を持ってないのであり、道心において分裂していることになる。薫はあくまで俗聖という八宮の生き方を参考にしたのであり、はからずも、俗物性が隠微な形で顕現しているが、「奇特な人柄」で覆われることで体裁を保っていることになる。

五 大君とのかかわり

大君とかかわる薫の「顔」表現を再度挙げれば次の三例になる。

- | | | | |
|---|-------------|----------|------|
| 4 | いとうけぱりたる後見顔 | 地・↓句宮・椎本 | 206頁 |
| 5 | 事あり顔 | 会・↓大君・総角 | 228頁 |
| 6 | いと馴れ顔 | 地・↓大君・総角 | 242頁 |

右のうち、用例4は句宮に対する「顔」表現になるが、宇治姉妹との関連で使用されているのでこの節で扱うことにする。この4は、八宮死去の年も改まった花盛りの頃、句宮が中君と贈答した後に、薫と対した時のものになる。

(句宮) 御心にあまひたまひては、ただ中納言を、とざまかうさまに責め恨みきこえたまへば、をかしと思ひながら、いとうけぱりたる後見顔にうち答へきこえて、あだめいたる御心ざまをも見あらはす時々は、黒「いかでか。かからんには」など、申したまへば、宮も御心づかひしたまふべし、句宮「心になかなふあたりを、まだ見つけぬほどぞや」とのたまふ。(椎本206頁)

中君への執心があるゆえの句宮の恨み言に対して、それをあしらう薫は「いとうけぱりたる後見顔」でいるという。薫は句宮に対して、宇治姉妹の当然の後見人だという顔つきをしていることになるが、姉妹の後見人は、自分しかいないのは事実だし、八宮から後見を依頼されていたのも事実である。しかし、実際は姉妹の結婚まで裁量できるわけではなく、何よりも大君の拒絶にあっているのが実情になる。薫としては、いつか大君は自分に靡いてくれるはずだという一方的な思い込みがあるわけで、それが「いとうけぱりたる後見顔」を取らせている。実際は姉妹の結婚を裁量できないのに、それが可能であるかのような表情をとるところが薫になる。そして、この表情は「うけぱりたる」とあるように自信満々である。句宮の優位に立っていることもここには反映している。

薫がこうした表情をとってしまったのは、大君側に責任の一端はある。八宮の忌みが果てて訪問した薫を前にして、大君は、薫を「すずろに頼み顔」(椎本189頁)でいたことを回想していた。だから、薫が「いとうけぱりたる後見顔」になるのも仕方ないといえるが、大君はあくまでも「すずろに——何となく」でいたことは動かない。また、薫との関係性は、「よその御後見」(総角213頁)であると語り手によって確認されている。薫が「いとうけぱりたる後見顔」をするのはやり過ぎであり、句宮に対する優位性に依拠したおごりになる。大君との関係の実際を直視するのを忌避しており、先行きに対する己の不安を隠蔽している。自身の幻想でしかない一方的な思い込みに依拠することで、「いとうけぱりたる後見顔」を取らせている。自身の内面の不安に気付くこととしないことによって、ここでも薫は分裂していることになる。

「いとうけぱりたる後見顔」自体は、薫特有の表情ではない。しかし、薫の文脈に置かれると、薫特有の表情が浮上してくる。正篇の世界でも使用された次の用例の5「事あり顔」や6「いと馴れ顔」も、夕霧を受けて薫的になる。

この5は、薫がはじめて大君の寝所に侵入した翌朝の段にある。

明かくなりゆき、むら鳥の立ちさまよふ羽風近く聞こゆ。夜深き朝の鐘の音かすみに響く。大君「今だに。いと見苦しきを」と、いとわりなく恥づかしげに思したり。薫「事あり顔に朝露もえ分けはべるまじ。また、人はいかが推しはかりきこゆべき。」

(総角28頁)

「事あり顔」は、男女の間に実事がなかったにもかかわらず、あたかもそのように見える態度や素振りをいう使われ方であり、実事があつた際には使用されない。「事もあり顔」の強調表現を含めて、この物語で都合12例見られるが、前稿で確認したように、それらの用例の中で夕霧の場合がここでは重要になる。落葉の宮に忍んだ夕霧は、その拒絶にあつて契りを結べないまま夜を明かしたが、「あさましや、事あり顔に分けはべらん朝露の思はむところよ」と恨んでいた。そして、薫も「事あり顔に朝露もえ分けはべるまじ。また、人はいかが推しはかりきこゆべき」と、夕霧と同じように恨んでいる。実事の不在を前提にして、「事あり顔」でしかないことへの恨みを言い、それなのに「朝露を分け」て帰ることになるふがいなさ、他者の思惑への懸念の表明、というように両者のありようは相似している。この近似した表現の使用には、夕霧から薫への継承性が認められるし、引用構造として見れば、夕霧が引用されることで薫と大君の関係の不毛性が先取りされているとされる。

そして、夕霧の引用を継承しながら、さらに薫固有の表情が刻印されることになる。それが次の「いと馴れ顔」である。八宮の喪も明け、薫は二度目の侵入を企てるが、その気配を察した大君はいち早く逃れ出してしまう。

(大君は)いととく這ひ隠れたまひぬ。(中君が)何心もなく寝入りたまへるを、いといとほしく、いかにするわざと胸つづれて、もろともに隠れなばやと思へど、さもえたち返らで、わななくわななく見たまへば、灯のほのかなるに、⁶いと馴

れ顔に几帳の帷子をひき上げて入りぬるを、いみじくいとほしく、いかにおぼえたまはむ、と思ひながら、あやしき壁の面に屏風を立てたる背後のむつかしげなるにみたまひぬ。(総角242頁)

薫は「いと馴れ顔」に寝所に侵入してくるとされるが、これは大君の視線で捉えられた表情であるとともに、薫自身の表情も言い当てている。とにかく薫は、「いと馴れ顔」で侵入してきたことは間違いない。「馴れ顔(物馴れ顔の意で、親密顔の意ではない)」の使用もすでに前稿で確認したが五例あり、光源氏一例、夕霧一例、薫に二例、匂宮に一例となる。夕霧の場合は手紙の書き様であったが、残りの用例は、女性のもとにしるぶ姿を言うことになる。

薫が「いと馴れ顔」になれるのは、匂宮に「いとうけばりたる後見顔」を作ることができたことの延長として理解されるが、また、二回目の侵入ということもある。薫としては、もう大君は拒絶しまいと、思い込みがあるわけであり、寝る姿の鞋になつてゐる。また、その思い込みによって馴れ馴れしげに「好き者」を演技しているが、他者の思惑を度外視した強引さがある。夕霧は、「馴れ顔」で後朝の文を雲居雁に送ったが、結婚成立による得意さで、物馴れた素振りを演技していた。この夕霧を受けて、薫も「馴れ顔」を装い、大君のもとにしている。ともに物馴れた素振りをしてしまうところに、逆に内面にある物馴れないぎこちなさや不安から逃れようとする心的機軸の発動が認められる。薫の場合は、その優しさもかわっているが、「馴れ顔」になれる前提がないのに、こうした表情をとるところが、薫の不毛性を逆に表現しているわけである。

大君との交渉で使用される「顔」表現は、「事あり顔」と「いと馴れ顔」の二例のみである。しかし、ささやかな二例ながら、薫的な表情はここに刻印されており、女性との距離の取り方も表現されているのである。そして、同じ表情が中君にも反復されるところに、薫の退却性が認められることになる。

六 中君とのかかわり

「事あり顔」になるのを問題にし、また、「馴れ顔」に振るまう薫の表情は、中君に対しても再度同じように反復されるが、こうした語りによって、停滞し退嬰的な薫像がさらに顕著になってくる。中君にかかわる用例は、次の三例になる。

- | | | | | |
|----|------------|-------|-----|------|
| 8 | 事あり顔 | 地・↓中君 | ・宿木 | 388頁 |
| 10 | いと馴れ顔 | 地・↓中君 | ・宿木 | 416頁 |
| 11 | ことごとしくしたて顔 | 心・↓中君 | ・宿木 | 430頁 |

ここに掲出しなかった用例7と9は、ひとまずおいて、右の用例を先に見ることにする。夕霧の六の君との結婚も決まった匂宮が帰宅していないのを確認して、早暁に薫が中君のもとに訪れる段であり、中君から宇治行きを依頼されたりして、二人は様々に話し込むことになる。

日さしあがりて、人々参り集まりなどすれば、あまり長居も⁸事あり顔ならむによりて、出でたまひなんとて、薫「いづこにても御簾の外にはならひはべらねば、はしたなき心地しはべりてなん。いま、また、かやうにもさぶらはん」とて立ちたまひぬ。

(宿木388頁)

早暁から「日さしあがりて」となるまで話をしたわけだが、匂宮不在の長居は、「事あり顔」になると危惧して、薫は辞去しようとしている。したがって、「事あり顔」であることをかこつものではなく、単に人々の思惑を気にしているに過ぎない。いわば、当然の配慮だが、しかし、簡単に辞去していくのは、それなりの理由がある。すなわち、中君から宇治行きを依頼されたからであり、その機会を利用すれば、大君死後にたかまつた中君への思いを訴えることができる。だ

から辞去の際に、御簾の内での対面をさりげなく望むことを忘れてはいるが、薫の下心は、「事あり顔」であることかこつことなく、辞去している。しかし、「事あり顔」云々が語られてしまふところ、薫のな意味合いが認められるのであり、「事あり顔」であるかどうかが問題になるところに、薫の女性関係の特質が浮かび上がってくる。すなわち、愛する女性と契りを交せない不毛な停滞性がこうしたところでも浮上しているのである。

匂宮と六の君の三日夜の儀も盛大に行われ、中君は夜離れの身を悲嘆し、薫と消息を交わし合う。その翌日、再び匂宮の不在を見越し、夕方になって薫は訪問する。中君は、みずからの依頼による訪問であることと匂宮の夜離れによって気が緩んでいたのか、御簾の内に薫を招き入れてしまふ。薫はそれが嬉しく「隔てすこし薄らぎはべりける御簾の内よ」(宿木413頁)と軽口をたたき、「暗くなりゆくまで」ぐずぐずし、恋情を仄めかすようになる。中君としてもうるさく、困惑し、奥に引き下がろうとするので、薫は引き止め、さらに母屋に入り込んでしまふ。

のたまふ声の、いみじくうたげなるかなと、常よりも昔思ひ出でらるるに、えつつみあへで、寄りあたまへる柱のものと籬の下より、やをらおよびて御袖をとらへつ。女、さりや、あな心憂、と思ふに、何ごとかは言はれん、ものも言はで、いとどひき入りたまへば、それにつきて¹⁰いと馴れ顔に、半らは内に入りて添ひ臥したまへり。

(宿木415～416頁)

薫の女性に対する距離の取り方は、中君になっても変わらない。かつて大君の寝所に侵入した時と同じ様に、薫は「いと馴れ顔」で添ひ臥している。「馴れ顔」が、薫の表情として刻印されていることは間違いない。ここの「馴れ顔」に対して、全集本は「逢瀬の応接にもなれた所作態度」としているが、こどもこうした態度を取る演技性を認めるべきだろう。物腰の柔らかない優しさを演技しているわけだが、大君の場合と同じく、契りを交せる前提がないのに、そうした態度が女

性を懐柔できるものとの一方的な思い込みがここにも存在している。

中君は懐妊中なので、曉近くまで寄り添っていても、それ以上の関係に進展することはない。薫は、様々な心を残して辞去せざるを得ないが、「まだいと深き朝に御文」を送っている。後朝の文のつもりであるが、ここにも大君の場合と同じような反復がある。薫の歌は、「いたづらに分けつる道の露しげみむかしおぼゆる秋の空かな」（宿木49頁）というものだが、すでに指摘したように「事あり顔に朝露も分けはべるまじ」などという、後朝の別れの類型である「朝露を分けて帰る」の踏襲・反復が見られる。

「事あり顔」と「馴れ顔」という「∴顔」表現の反復、「朝露を分けて帰る」という類型の反復、こうした反復のうちに停滞低迷する薫像が主題化されていることになる。そして、次の用例11で、薫が、中君の思い人になれないことが暗示され、二人の交渉が収束していくことが明かになる。

薫が帰った後に二条院に戻った匂宮は、薫の移り香によって、中君との間に何事かがあったと邪推し、その邪推が逆に中君への執着となつて、二条院にとどまるようになる。それは、中君が見限られたのではない証になるので、薫としても複雑な思いがあるものの、安心せざるを得ない。匂宮が二条院にとどまるとしたら、何かと入り用になるが、後見のいない中君をおもんばかつて、薫は衣類など有り合わせのものを取り繕って贈与する。次の引用は、下々の者までに衣類を送ったことに対する語りである。

うとからむあたりには、見苦しくくだくだしかりぬべき心しらのさまも、侮るとはなけれど、何かは、11ことごとくしたて顔ならむも、なかなかおほえなく見とがむる人やあらん、と思すなりけり。
(宿木49頁)

親しくない間柄だったら、くだくだしい物まで贈るのは失礼になるが、中君だったら構うまい、ぎょうぎょうしい物を「ことごとくしたて顔」で贈って、不審がる人がいたら困るだろう、というのが薫の

判断になる。薫の優しい配慮であり、物語はその「深き情」を確認している。だから、下々の者にまでの贈物をしたということになるが、こうした贈与は、中君の後見役としての表明になり、恋情の発動を自ら制御していることとする姿勢を示すことになる。それができるかどうかは別のことであり、この後も何かと中君に言い寄ることも語られていくが、物語としては、こうした贈与で薫と中君の関係に結末を与えようとしていることになる。中君が薫に浮舟の存在を告知するのは、この後すぐである。「∴顔」表現にもどれば、「ことごとくしたて顔」になるのを忌避する薫の姿勢が示されているが、対する女性との距離の取り方を意識する薫的なあり方としてここは確認できるだろう。また、こうした表情で贈与の品物に気を回すところに、後見役に徹せざるを得ない立場が確定されることになる。そして、その立場が確定されるから、今後も中君のもとへの訪問が可能になることになる。

以上の用例は「宿木」巻のものになるが、この巻には薫にかかわる「∴顔」表現がもう二例残っているの、それを見ておきたい。用例7の「知らず顔」は、女二の宮降嫁にかかわるもので、降嫁を承引する段になる。

女二の宮も御服はてぬれば、いとど何ごとにかは憚りたまはん。さも聞こえ出でば、と思しめしたる御気色など告げきこゆる人々もあるを、あまり⁷知らず顔ならんもひがひがしうなめげなり、と思しおこして、ほのめかしまゐらせたまふをりをもあるに、はしたなきやうはなどてかはあらん。
(宿木372頁)

「知らず顔」は、この物語に限らずとも多い「∴顔」表現であり、「知らず顔」を選択したり、忌避したりする様々な場合がある。ここは、恐れ多い降嫁の件を薫が「知らず顔」でいるのは無礼になるとの判断で使用されている。薫なりの気の回ししようが伺えよう。次の9も「知らず顔」になる。匂宮と六の君の婚儀が進行し、様々な

物思いで寝覚めがちな薫が、このみに登場する召人の按察の君のもとで一晩過ごした場面になる。薫は「苦しげに急ぎ起き」て帰ろうとするので、按察の君が恨みがましく歌を詠み、贈答歌となり、さらに次のような薫の言葉になる。

妻戸押し開けて、薫「まことは、この空見たまへ。いかでかこれを、知らず顔にては明かさんとよ。艶なる人まねにてはあらで、いとど明かしがたくなりゆく、夜な夜なの寝ざめには、この世かの世までなむ思ひやられてあはれなる」など、言ひ紛らはしてぞ出でたまふ。

(宿木407頁)

薫の物思いは、按察の君によって慰藉されることはなく、だから「苦しげに急ぎ起き」て帰ろうとしている。それを見咎められたので、早く帰る理由として「まことは」と切り出して、以下に説明している。これらの言葉は、全集本が「しだいに按察の君とは無関係の内容をはらんで、薫のなかば独自の言葉ともなっていく」としているように、独自の存在である。按察の君とは思ひを共有できないからであり、すでに慰藉される存在ではありえない。それは按察の君が、大君ではないからである。

ここで薫は、「この空見たまへ」といっているが、この空は大君と眺めた空になる。その空は、「総角」巻冒頭部、薫が「事あり顔」をかこった、大君の寝所に侵入した翌朝の空であった。

はかなく明け方になりけり。御供の人々起きて声づくり、馬どものいばゆる音も、旅の宿のあるやうなど人の語る思しやられて、をかしく思さる。光見えつる方の障子を押し開けたまひて、空のあはれなるをもるともに見たまふ。女もすこしゐざり出でたまへるに、ほどもなき軒の近さなれば、しのぶの露もやうやう光見えてゆく。

(総角227頁)

「空のあはれなるをもるともに見」たことが、薫にとって唯一の後朝の思い出になる。「女」とされる大君も「すこしゐざり出で」て見たのが、秋八月の明け方の空であった。「総角」巻の時点は、八宮の

周忌明けの八月二十日ごろ以前、「宿木」巻は匂宮と六の君の三日夜の儀が行われた八月一日のことになるので、「総角」巻の時点も八月一日である蓋然性は高い。^(?)「宿木」巻で薫が「この空見たまへ」といったのは、単なる弁解や無常感に囚われたからではなく、ちょうど一年前に「空のあはれなるをもるともに見」たことを想起しているからに他ならない。言ってみれば、八月一日は、大君との空の記念日になる。

大君と空を眺めた記念日に、匂宮は三日夜の儀を迎え、思慕した大君はすでに亡い。女二の宮降嫁の意向があるが、「故君にいとよく似たまへらん時に、うれしからむかし」(宿木408頁)との思いを抱いている。また、中君は夫の夜離れによって苦悩を深めている。様々に去来する憂愁の念によって、寝覚めがちである。按察の君のもとで過ごしてみても、慰藉されるものではない。今日という日の思い出は、大君と「空のあはれなるをもるともに見」たことである。それを思うと「苦しげに急ぎ起き」て、空を眺めたくなる。「空のあはれ」を「知らず顔」にしていることなどできないのである。そして、眺めていれば、「この世かの世までなむ思ひやられてあはれ」はいつそう募ってくる。「かの世」には大君がいるはずである。こんな思いを按察の君に訴えても、埒があくものでもない。薫は、「言ひ紛らはしてぞ出でたまふ」ことになる。「知らず顔」でいられない、きわめて大切なものは、八月一日の空なのである。

七 浮舟とのかかわり

残る用例は、浮舟にかかわるものになる。

- | | | | | |
|----|------------|-------|-----|------|
| 12 | つれなし顔 | 心・↓浮舟 | ・東屋 | 75頁 |
| 13 | 昔を忘れ顔 | 心・↓中君 | ・浮舟 | 99頁 |
| 14 | 気色のいささか乱り顔 | 地・↓匂宮 | ・蜻蛉 | 210頁 |

12は浮舟の母によって捉えられた薫の表情になる。薫と匂宮の二人の上流貴顕を目の当たりにした母は、次のように思っている。

あいなう、大将殿の御さま容貌ぞ、恋しう面影に見ゆる。同じうめでたしと見たてまつりしかど、宮は思ひ離れたまひて、心もとまらず。侮りて押し入りたまへりけるを思ふもねたし。この君は、さすがに、尋ね思す心ばへのありながら、うちつけにも言ひかけたまはず、¹²つれなし顔なるしもこそいたけれ、よろづにつけて思ひ出でらるれば、

(東屋74〜75頁)

匂宮が強引に浮舟に言い寄ったので、浮舟母の匂宮評は辛い。そして、その影響で薫への評価は高い。浮舟を迎えたい意向を薫は漏らししているものの、「うちつけ」な行動にはせず、どちらかと言えば否定的な表情になる「つれなし顔——素知らぬ顔」なもの、匂宮と対比されるがゆえに、「いたし——りっぱだ」とされている。男女の問題で「つれなし顔」をされるのはいいことではないが、今の浮舟母にとってはそれが好ましく写る。見る側の思惑が、見られる者の表情の意味を決定するわけである。

だからといって表情を表す主体とまったく無関係になされるわけではない。浮舟母の見方は薫の一面を鋭く突いていて、薫の行動様式を相対化している。薫としては、受領風情の娘に自ら積極的になるのはためらわれるのであり、そうしたわだかまりが他者から捉えられれば、「つれなし顔」の表情になる。薫の浮舟に対する距離の取り方が、はからずも浮舟母によって、捉えられているわけである。

また、薫としては、すでに浮舟を宇治に据えた後も、大君を忘れたかのように新たな女性と交渉を持つのは、中君の手前もあって、あまり積極的になれない。

いまいとよくもてなさんとす。山里の慰めと思ひおきてし心あるを、すこし日数も経ぬべき事どもつくり出でて、のどやかに行

きても見む。さて、しばしは人の知るまじき住み所して、やうやうさるかたにかの心をものどめおき、わがためにも、人のもどきあるまじく、なめにてこそよからめ。にはかに、何人ぞ、いづよりなど聞きとがめられんもの騒がしく、はじめの心に違ふべし、また、宮の御方の聞き思さむことも、もとの所を際々しうあて離れ、¹³昔を忘れ顔ならん、いと本意なし、など思ししづむるも、例の、のどけさ過ぎたる心からなるべし。(浮舟99頁)

体面をはばかる薫は、「昔を忘れ顔」になるのを恐れている。浮舟を得る以前の「つれなし顔」が、まだ、継続している。また、「昔を忘れ顔」を忌避するところにも、停滞する薫像がさらに刻印されている。

入水以前の浮舟に対しては、この二例のみになるが、この二例のみでも基本的な浮舟に対する表情が伺えるわけであり、こうした表情が浮舟を追い詰めて行ったとも言えることになる。

浮舟の失踪に、匂宮との密通が絡んでいたことは、薫の知る所となるが、匂宮と対面してもそのことを口外できるわけではない。しかし、浮舟との経緯を匂宮に話して、密通を仄めかすなかで、薫の表情が、14「気色のいささか乱り顔」(蜻蛉210頁)になるのを止めることはできない。匂宮としても、その表情は「いとあやしきいとほし」と見るところとなる。取り乱すことのない薫の、はじめての取り乱しになる。

「手習」巻になって、薫は浮舟の生存を知らされるが、その直後の反応は、体面を気にしたり、匂宮の出方を危惧したりして、取り乱したままである。明石の中宮には、匂宮のことに關して。次のように啓している。

「かのこと、またさなん、と聞きつけたまへらば、かたくなにすぎすぎしうも思されぬべし。さらに、さてありけりとも、¹⁵知らず顔にて過ぐしはべりなん」(手習355頁)

他者の体面を気づかって「知らず顔」を取るのには礼儀でもある。し

かし、他者への配慮もなく、ただ自分の体面の為だけに「知らず顔」を作るのは、すでに他者不信に傷ついた病んだ精神のありようになる。誰にでも見られる表情の「知らず顔」が、薫においては退廃の極みとして刻印されていることになる。

おわりに

以上で、薫における「…顔」表現の検討を終える。「よろづも知らず顔」であった幼児薫の表情は、成人するに及んで、固有の表情を獲得することになった。特に、「事あり顔」や「馴れ顔」は、薫特有の表情として刻印された。そして、その表情が反復され、また、この表現も含めて、絶えず女性との距離の取り方を計測してしまふ表情も反復されていた。「心寄せあり顔」は玉鬘の大君に対する表情、大君と中君には「馴れ顔」の表情、浮舟には「つれなし顔」の表情、あるいは、大君追慕の「知らず顔」や「昔を忘れ顔」を忌避する表情などは、いづれも薫の人間関係における距離の取り方を示していた。そして、こうした「…顔」表現の反復が、停滞した不毛な薫のあり方を語っていたのであった。そして、こうしたささやかな用例数からでも、人間関係の網の目を読まずにはいられない精神の存在が認められるのであり、表情の持つ意味が一つの水準として暗示されているのである。

注

- (1) 各用例の示し方は、整理番号、本文、文章の区別(「地」は地の文、「心」は心内語、「会」は会話文、であることを示す)、↓の下は顔を向ける相手、巻名、頁数の順になる。本文の引用は日本古典文学全集本(小学館)による。
- (2) 幼児の薫と光源氏に関しての論として、松井健児『源氏物語』の小児と筈―身体としての薫・光源氏の言葉―(『源氏研究』1、一九九六年四月)がある。

(3) 篠原昭二「竹河」(『源氏物語必携』学燈社、一九七八年十二月)、三谷邦明「源氏物語第三部の方法」(『物語文学の方法Ⅱ』有精堂、一九八九年六月)。

(4) 藤村潔「薫」(『国文学』一九九一年五月)。

(5) 「馴れ顔」をすべて親近の意で論じるものに、安藤重和「馴れ顔」考―薫論ノート①―(『愛知教育大学国語国文学報』31、一九七七年三月)がある。

(6) 添い臥した中君と別れる場面には、多様な「心」のありかたが語られている。

(7) 「総角」巻で、薫が大君の寝所に押し入った日は明確にならないが、その翌朝の女房の言葉に、八宮の一周忌(八月二十日ごろ)に「日は残りなくなりはべりぬ」(総角231頁)との発言があり、準備の様子などが匂わされて、「御服などはてて」(総角232頁)との記述になっている。蓋然性として、八月十八日ごろである可能性が高い。また、「宿木」巻は、匂宮の結婚一日目は、「十六日の月やうさしあがるまで心もとなければ」(宿木309頁)とあるので、三日目は十八日になる。また、薫が按察の君と過ごした日は、「按察の君とて、人よりはすこし思ひましたまへるが局におはして、その夜は明かしたまひつ」とあり、「その夜」は三日夜の儀があった十八日になる。ちょうど一年の経過になる。